

# 栄養士養成施設における 女子学生の職業観

光 森 女 里  
吉 田 繁 子  
菅 淑 江※

## はじめに

現在の栄養士養成施設の大半は、栄養士に必要な専門教科が、大学教育カリキュラムの中で共通して取得できるシステムとなっている。この中で、食環境の変化が著しい現社会の要請に対応し得る栄養士を養成することは、2年間という短期間の修業年限であることと合せて、極めて容易なことではない。しかも、現代学生の気質が、専門教育を受けるためにコースを選び、かつ一途な職業意識を持っているとはいえないようである。もちろん、栄養士の需要が行き詰まっていることも、勉学への意欲をそいでいる原因の一つであろう。

筆者らは、1971年に「栄養士養成施設における学生の職業観」について報告したが、<sup>1)</sup>今回、同一の調査により学生の意識の動向を知るために、再度調査を行ったので報告する。

## 調査対象および方法

調査対象：岡山市に所在する2短大の栄養士養成課程を履修する女子学生を対象とした。有

効回収数は1年次生176名、2年次生160名、合計336名(回収率96.6%)であった。

調査方法：アンケート式により、留め置き調査とした。

調査時期：1976年11月上旬で、2年次生においては学外実習の終了直後とした。

## 調査結果および考察

### 1. 栄養士養成課程を志望した動機

栄養士養成課程を志望した理由をみると、表1に示すとおりである。

表1 栄養士養成課程志望理由

区 分 回 答	本 回 調 査				前 回 調 査	
	1 年		2 年		1 年	2 年
	人 数	%	人 数	%	%	%
栄養士資格取得のため	142	80.7	130	81.3	77.6	80.5
栄養士資格取得は第1目的ではない	32	18.2	29	18.1	22.3	19.2
無 回 答	2	1.1	1	0.6	0.1	0.3

「栄養士資格取得のため」というものが、1、2年次生共80%を越え、最も多かった。前回調査結果においては、1年次生が77.6%とやや低い、やはり1、2年次生共、本回同様最も多かった。学年による差はいずれも2年次生の方がわずかではあるが多い。太田氏らの<sup>2)</sup>研究報

※中国短期大学

告の43.5%にくらべると、本調査対象者達の栄養士指向性は高い。

志望進路決定の際のいかにかわらず、栄養士資格を取得することを希望した理由を、各項目についていくつでも選んだ結果は、表2のとおりであった。

表2 栄養士資格取得理由

回 分 答	本 回 調 査				前 回 調 査	
	1 年		2 年		1 年	2 年
	人 数	%	人 数	%	%	%
いざという時役立つ	150	85.2	128	80.0	72.2	71.9
結 婚 後 役 立 つ	86	48.9	69	43.1	57.1	49.7
栄養士として働くため	68	38.6	57	35.6	36.6	41.4
教 養 の た め	18	10.2	42	26.3	14.1	16.6
なんとなく興味がある	31	17.6	34	21.3	14.4	22.5
女 子 に 適 す る	7	4.0	11	6.9	10.6	11.1
自分の性格に適する	15	8.5	9	5.6	11.2	7.3
そ の 他	3	1.7	7	4.4	3.7	3.4
無 回 答	1	0.6	0	0	0	0

最も多いのは、「資格を持っていればいざという時役立つ」という潜在志向<sup>3)</sup>のものが1年次生で85.2%、2年次生では80.0%であり、前回においても、1、2年次生共約70%で最も多かった。「栄養士として働くため」という積極志向<sup>3)</sup>のものは、1年次生で38.6%、2年次生では35.6%であり、2年次生においては前回よりやや低い。このように、卒業後すぐ栄養士資格を活用しようとするものは約1/3であり、いざという時に備えて資格を取得しておこうとするものが最も多いという結果は、前回とも変わらない傾向である。戦後十数年までは、職業教育に徹した各種学校による養成が多く、学生間においても、卒業イコール全員栄養士で就職という自然の流れが見られたが、その後、短期大学への昇格、養成施設の急増、進学率の増加等により、需要と供給のアンバランスもさることながら、進学大学選択時点において、自分の将来設計を的確に持たない学生が多いことが、このような結果としてあらわれているのではなからうか。これに関連して第2位が「結婚後役立つ」という項目になり、前回においても同様で、家庭志向の度合も強くあらわれている。そのほか、「興味があったから」と表現したものが、今回、前回共約1/5を占めている。

次に「栄養士養成課程を選択するにあたり誰の意見が強かったか」を、順に1位から3位まで選ぶ設問に対して、本人の自覚によるものが計265例(78.8%)で最も多く、これは入学するのが本人であるので当然ではある。次いで母親の影響によるものが59例(17.4%)であり、父親の影響が27例(8.2%)あり、教師、兄弟、先輩、友人の順に影響を受けている。前回の結果においても、順位は全く同じであった。沢野氏<sup>4)</sup>による東京都内およびその周辺都市の養成施設における調査結果においても、同様な傾向が見られた。

入学することに決めた時点で「栄養士業務内容をどの程度知っていたか」をみると、表3に

示すとおりになる。

表3 入学時における栄養士業務内容の理解度

回 答 区 分	1 年		2 年	
	人 数	%	人 数	%
仕事の内容は十分知っていた	2	1.1	0	0
〃 少しは知っていた	148	84.0	124	77.5
〃 全く知らなかった	26	14.8	36	22.5

「仕事の内容は十分知っていた」と「少しは知っていた」を合せると、1年次生で85.1%、2年次生では77.5%、平均81.3%がある程度知識を持って入学したことになる。前回においては平均96.4%となっている。2年次生がやや少ないということは、実際に授業を受け、学外実習を終えてみて、その業務の煩雑さをあらためて広く知見した結果、自己の判断を修正したことによるものではないかと考えられる。「仕事の内容は全く知らなかった」は、1年次生で14.8%、2年次生では22.5%で平均18.7%であるが、前回においては平均5%以下であり、極端なひらきがあらわれた。これは大学進学率が年々伸び、まず合格しやすい学校を選択して受験する傾向が多くなり、希望する専攻科目や職業との結びつけは、第2の問題として受けとめられている結果と考えられ、また第1志望校が不合格になった学生が、たまたま入学できたところへ落ちつくということも原因といえよう。

## 2. 栄養士教育内容および教育期間

表4 栄養士教育の内容

回 答 区 分	本 回 調 査				前 回 調 査	
	1 年		2 年		1 年	2 年
	人 数	%	人 数	%	%	%
栄養士として働く基礎はできる	128	72.7	111	69.3	69.3	65.9
栄養士として働くには不十分である	28	15.9	34	21.3	17.2	26.8
栄養士教育にかたよりすぎる	7	4.0	7	4.4	5.5	4.0
栄養士として十分働ける教育内容である	8	4.5	1	0.6	6.0	1.4
そ の 他	5	2.8	7	4.4	2.0	1.9

栄養士教育内容については表4のように、1、2年次生共約70%が「栄養士として働く基礎はできる」と答えているが、各自が考える栄養士像はそれぞれ異なるから、これで教育内容がよいという判断はし難い。また、学外実習を終えた2年次生の21.3%が「栄養士として働くには不十分である」と答えている点をも考慮しなければならない。もっと具体的に「何が不十分か」を今後追求していく必要がある。全般的な傾向としては前回と同じである。

表5 栄養士教育の修業年限

区 分 回 答	本 回 調 査				前 回 調 査	
	1 年		2 年		1 年	2 年
	人 数	%	人 数	%	%	%
短 か す ぎ る	101	57.4	116	72.5	55.8	77.7
適 当 で あ る	41	23.3	29	18.1	26.5	18.5
長 す ぎ る	2	1.1	0	0	2.2	0
わ か ら な い	30	17.0	15	9.4	15.5	3.8
無 回 答	2	1.1	0	0	0	0

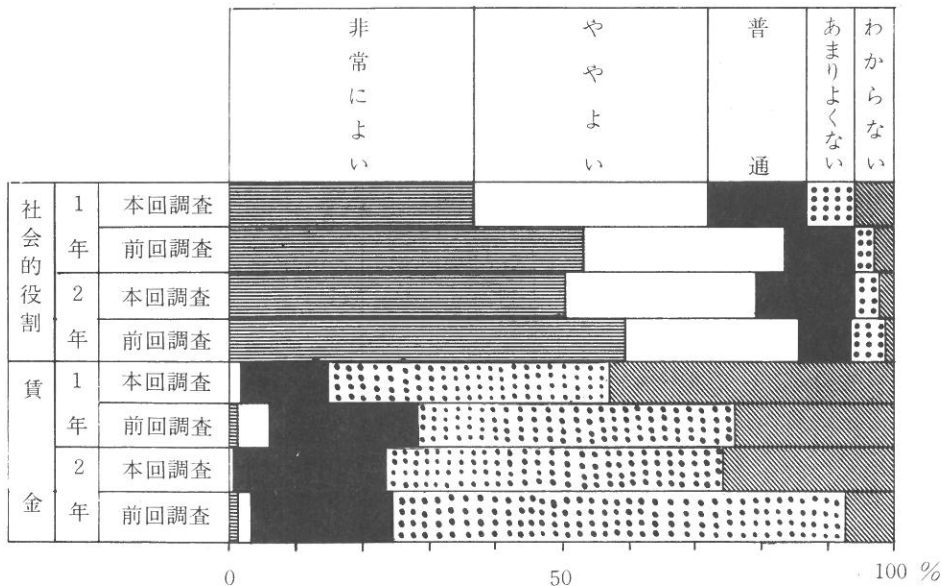
次に「修業年限が適当であるかどうか」については、表5のとおりである。1年次生に比べて2年次生になると「短かすぎる」と答えたものが72.5%と多くなり、前回は同じ傾向がみられる。先に約70%が「働く基礎はできる」と答えながらも、「短かすぎる」という矛盾した回答が、1、2年次生平均で65%もあるのは、栄養士教育内容の深さを望むよりも、むしろ「学生生活を少しでも長く楽しみたい」という願望が、一部の学生に強く現われているためではないかとも思われる。しかし、食環境の複雑多様化に対応し得る栄養士が要望されている今日、栄養士養成期間の再考は必要である。

管理栄養士志望については「なりたいと思う」が1年次生で34.1%、2年次生では36.3%と約 $\frac{1}{3}$ のものが望み、前回の37.5%、42.3%より、わずかながら減っている。また、1年次生で49.4%、2年次生では43.1%のものが「わからない」と答えていることは、社会における管理栄養士と栄養士との位置づけ、職務内容の不明確さが反映しているようである。

### 3. 栄養士の評価

栄養士の仕事に対する社会的役割をどのように評価しているかについては、図1のとおりである。

図1 栄養士の仕事に対する評価



1年次生で72.2%、2年次生では75.0%の学生が「非常によい」または「ややよい」と答えている。これはいずれも前回より約12%減っている。しかし、大半が栄養士の社会的役割の重要性を認めていることは、今後の栄養士教育の中で、その認識を実践できるように指導する必要性を示唆していると思われる。

賃金については、「非常によい」「ややよい」と答えたものはほとんどなく、「普通」と答えたものが1年次生で13.1%、2年次生では22.5%あり、前回では「非常によい」「ややよい」を合せると、1年次生で5.6%、2年次生では3.0%、「普通」はそれぞれ22.5%、21.3%である。「あまりよくない」が大半を占め、1年次生で42.1%、2年次生では50.7%となっており、前回は48.0%、69.1%である。「わからない」という回答は、前回は1年次生で23.9%、2年次生では6.6%あり、今回は1年次生で42.6%、2年次生では26.3%である。しかし「わからない」と答えたものが1・2年平均で34.5%いることは、評価基準を何におくかわからず、現実社会の賃金レベルを知らない学生が少なくないことを示している。

#### 4. 職 業 観

表 6 就職希望について

区 分 回 答	本 回 調 査				前 回 調 査	
	1 年		2 年		1 年	2 年
	人 数	%	人 数	%	%	%
就 職 し た い	162	92.0	151	94.4	87.4	93.7
栄養士として働きたい	96	59.3	86	57.0	69.0	74.5
栄養士として働きたくない	23	14.2	35	23.2	14.0	18.2
わ か ら な い	43	26.5	30	19.9	17.0	7.3
就 職 し た く な い	3	1.7	4	2.5	2.5	2.6
就職したいが事情で働けない	3	1.7	1	0.6	0	0
わ か ら な い	8	4.5	3	1.9	10.1	3.7
無 回 答	0	0	1	0.6	0	0

就職希望の有無については、表6に示すように90%以上が「就職したい」としている。このうち「栄養士として働きたい」ものは、1年次生59.3%、2年次生57.0%で、わずかながら1年次生の方が多い。羽田氏ら<sup>5)</sup>の調査によると、栄養士としての就職希望者は平均61%で、今回の調査とほぼ同様の傾向がみられた。「栄養士として働きたくない」者は、1年次生より2年次生が多く23.2%いることは、前回と同じく注目すべきことである。

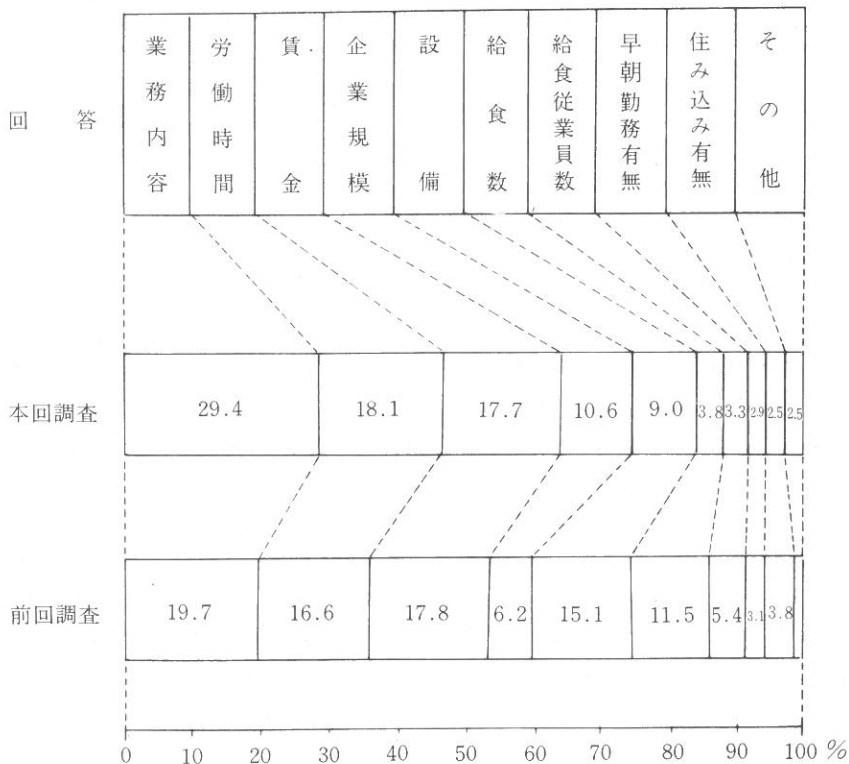
表7は「栄養士として働きたい」という理由の項目である。ここでは1年次生と2年次生で多少その理由が異なり、1年次生は「家庭に入ったとき役立つ」というのが第1位であるが、2年次生は第1位が「やり甲斐のある仕事だから」と仕事自体の評価をしていることは、学外実習による体験の結果生まれた答であろうか。次に「免許をとったから」という項目が、1、2年次生共2位であるが、坂本氏は「インターンも国家試験もない professional が誕生してい

表7 栄養士志望の理由

区 分 回 答	1 年		2 年	
	人 数	%	人 数	%
やり甲斐のある仕事だから	33	18.7	54	33.8
免許をとったから	45	25.6	40	25.0
家庭に入ったとき役立つ	53	30.1	33	20.6
自立できる	45	25.6	25	15.6
女子の職業として適している	25	14.2	20	12.5
料理が好きだから	27	15.3	12	7.5
自分に適している	12	6.8	11	6.9
家の仕事に関係がある	2	1.1	1	0.6
そ の 他	4	2.3	9	5.6

るだけで、免許所有者の現状から推すと非専門の専門家を生み出していることになる<sup>6)</sup>と述べており、自分の職業への目的意識を植えつけた栄養士の養成が望まれる。「栄養士として働きたくない」と答えた理由は、1、2年次生とも「自分に適していない」と答えたものが多く、特に2年次生では37.0%の高い率を占める。その他「仕事がきつい」「職場がない」「給料が安い」が上位を占める。前回の調査では大半のものが「社会的地位が低い」と答えたが、今回は特に2年次生では、その回答は6.2%と低い。2年次生は、学外実習をとおして、的確に栄養士の現状を把握していると考えられる回答であった。これは、栄養士業務を実際に体験しての自信喪失か、またはイメージのくい違いによるものではないだろうか。

図2 栄養士として働く場合の条件



また、「栄養士として働く場合の条件として何をもっとも重視するか」を図2の設問より1～3位を選んだのをみると、「業務内容」「労働時間」「賃金」の順位に希望しており、前回とはほぼ同様の傾向である。しかし、前回4位に「設備」を望んでいたが、今回は「企業規模」が4位となり、我国の経済が高度成長を終えた後の世相を考え合せ、安定した職場を選びたいことが伺われる。

表8 就職を希望する職場

区 分 回 答	本 回 調 査				前 回 調 査	
	1 年		2 年		1 年	2 年
	人 数	%	人 数	%	%	%
病 院	20	20.8	39	45.3	19.2	44.2
学 校	27	28.1	22	25.6	22.3	15.3
事 業 所	15	15.6	7	8.1	15.6	10.1
保 健 所	4	4.2	5	5.8	6.2	2.5
研 究 所	10	10.4	4	4.7	11.9	5.1
保 育 所	7	7.3	1	1.2	7.3	2.5
料 理 教 室	1	1.0	0	0	5.5	4.9
栄養士・調理師教育	0	0	0	0	1.4	2.0
養 護 施 設	2	2.1	0	0	2.4	6.6
自 衛 隊	0	0	0	0	0	0
給 食 セ ン タ ー	5	5.2	2	2.3	8.2	6.8
製品の指導・販売	0	0	0	0		
そ の 他	1	1.0	0	0		
ど こ で も よ い	4	4.2	5	5.8		
無 回 答	0	0	1	1.2		

栄養士として勤務を希望する職場は、表8のとおりで、前回とほぼ同じ職種を示している。2年次生については、1位に病院を約45%のものが希望しており、1年次生の倍以上であることも前回と同じである。これは、1年次生の時は漠然と職場に対する概念を抱いていたのが、2年次生になると学外実習その他で、病院栄養士の実態を把握し、自己の適性や働きがいを知ったためであろう。また関連職場の中で、病院の栄養士充足率が一番高い<sup>7)</sup>ということも一因といえよう。ついで、学校、事業所の順位となっているが、この傾向は、園田氏ら<sup>8)</sup>による福岡県内に所在する栄養士養成施設の調査にも表われている。特に学校については前回より希望者が増えたことは、社会情勢による公務員への指向性が高まったためと考えられる。料理教室への希望者が大巾に減っているのは、従来の実践教育と、現在の素養教育の差が出はじめていると思われるのは、考えすぎであろうか。なお、前回と同じく製品の指導販売に携わることへの希望者が皆無ということは、消費者教育の中での栄養士の立場・役割を考えたとき、もっと積極的に取り組み、今後開拓されるべき分野ではないかと思われる。

表9 栄養士としての適性

区 分 回 答	本 回 調 査				前 回 調 査	
	1 年		2 年		1 年	2 年
	人 数	%	人 数	%	%	%
非常にむいている	1	0.6	1	0.6	2.9	0.6
ややむいている	17	9.6	13	8.1	12.0	13.2
普 通	71	40.3	62	38.8	44.1	37.6
ややむいていない	41	23.3	45	28.1	17.2	22.5
非常にむいていない	7	4.0	14	8.8	7.7	7.2
わ か ら な い	39	22.2	24	15.0	16.1	18.9
無 回 答	0	0	1	0.6	0	0

表9は、栄養士としての適性を自己評価したものであるが、「非常にむいている」と「ややむいている」と考えたものは、1年次生10.2%、2年次生8.7%で、前回より減っている。「ややむいていない」と「非常にむいていない」と考えるものが1年次生で27.3%、2年次生では36.9%と2年次生の方が高く、前回の24.9%、29.7%に比較してやや高い率になっている。半数以上の者が「普通」か「わからない」で、“むいている”とも“むいていない”とも明確に自己評価できないようである。これは、「社会がまんべんなく一通りの事がやれる栄養士<sup>9)</sup>を要求し、また教科内容と現実の職場における業務内容とがかけはなれているため、栄養士として働く自信の無さと、職責の重さに対する不安が伺われる。

表10 職場生活に対する意識

区 分 回 答	本 回 調 査				前 回 調 査	
	1 年		2 年		1 年	2 年
	人 数	%	人 数	%	%	%
困難はあっても仕事を続ける	37	21.4	42	26.6	20.0	17.0
結婚するまで就業する	33	19.1	29	18.4	32.9	34.0
出産まで就業する	14	8.1	17	10.8	10.4	11.8
出産まで就業、子どもの成長後再就職したい	82	47.4	63	39.9	36.7	37.2
そ の 他	7	4.0	4	2.5	0	0
無 回 答	0	0	3	1.9	0	0

表10は職業生活に対する意識を表わしたものである。「困難はあっても仕事を続ける」は、1年次生で21.4%、2年次生では26.6%と前回より上回っている。特に2年次生では前回より

9.6%も高くなっていることは、経済の不安定な世相を反映しているのであろう。「結婚するまで就職する」と答えたものは約19%おり、前回の約33%に比較すると非常に少なくなっている。前回は「職業生活は一時的なもの」と考える傾向が強く伺われたが、今回の調査では「職業生活は一生継続したい」と考える傾向が高くなっていることは大きな特徴である。

表11 栄養士業の継続について

区 分 回 答	1 年		2 年	
	人 数	%	人 数	%
ずっと栄養士として働く	35	20.2	43	27.2
栄養士でもそれ以外でもよい	121	69.9	79	50.0
栄養士以外で働く	11	6.4	30	19.0
そ の 他	0	0	4	2.5
無 回 答	6	3.5	2	1.3

表11は栄養士業の継続について述べたものであるが、それによると就職希望者のうち、「ずっと栄養士として働く」と答えたものが1年次生で20.2%、2年次生では27.2%で前回の半分になっている。これに対して「栄養士以外」と答えたものは、1年次生で6.4%、2年次生では19.0%であり、「栄養士でもそれ以外でもよい」と答えたものは、それぞれ69.9%、50.0%と栄養士志向性が低いのは、その職務内容を知見し、また栄養士としての職場の少なさを認識したためであろうか。加えて好条件の待遇が魅力ある一般事務職の求人増にも、一因が伺われる。栄養士教育に携さわる者、また関係者は、学生の栄養士意識の低さを云々すると同時に、勉強した専門的知識を社会に還元できるように職場の間口を拡げ、栄養士必置義務、栄養指導業務の独占、および国家試験の法文化に努力することが早急に望まれる。

#### おわりに

岡山市に所在する2短期大学の栄養士養成課程を履修する女子学生を対象に、その職業観を中心とした意識の動向について、再度調査を行った。

1. 栄養士養成課程志望動機は、資格取得を目的とするものが、1、2年次生共約80%で、前回とはほぼ同程度である。
2. 栄養士資格を希望した理由は、「資格を持っていれば、いざという時役立つ」というものが第1位で82.6%であり、前回より約10%多い。
3. 栄養士養成課程選択に際して誰の意見が強かったかをみると、前回と全く同じく本人の意志によるもの、母親、父親、教師、兄弟、先輩、友人の順位である。
4. 入学時における栄養士業務内容知名度は81.3%であり、前回の約95%より、15%程度低い。
5. 栄養士教育内容については、約70%が「栄養士として働ける基礎はできる」と答えており、前回よりやや高い。
6. 修業年限については、前回と同じく約65%が短かすぎると答えている。
7. 「管理栄養士に将来なりたいか」の設問については、1、2年次生共約1/3が望んでおり、前回よりやや低い傾向である。
8. 栄養士業務の社会的役割については、70%以上がその重要性を認めているが、前回より約

10%減っている。

賃金については、「あまりよくない」という評価が、1、2年次生平均46.4%であるが、前回より、1年次生では約6%、2年次生では約20%減っている。

9. 就職希望は約93%で変化はみられず、そのうち栄養士として働きたいものは、1、2年次生共約60%である。前回より約15%減っている。
10. 栄養士志望の理由は、「やり甲斐のある仕事だから」と答えたものは、2年次生は33.8%で、1年次生では「家庭に入ったとき役立つ」が30.1%で最も多い。
11. 栄養士として働く場合に重要視する条件は、今回、前回ともに「業務内容」が第1である。次いで今回は「労働時間」「賃金」「企業規模」となり、前は「賃金」「労働時間」「設備」となっている。
12. 栄養士として勤務を希望する職場は、第1位が病院であり、前回とはほぼ同じ傾向を示す。今回は学校への希望者がやや増えたことが特徴である。
13. 栄養士としての適性を認めるものは10%以下で、むいていない傾向を認めるものが約30%いる。
14. 職業生活観については、「生涯仕事を続ける」と考えているものが約1/4で、前回調査よりやや高くなっている。「結婚するまで就業する」と答えたものが、前回の半分近くに減少している。

#### 文 献

- 1) 光森・沖田・吉田・菅：岡山県立短期大学紀要，第15号，11～18（1971）
- 2) 太田和枝他5名：第24回日本栄養改善学会誌，234（1977）
- 3) 沢野・太田：第16回日本栄養改善学会誌，172（1969）
- 4) 沢野勉：臨床栄養，**36** 751（1970）
- 5) 羽田明子他5名：第23回日本栄養改善学会誌，232（1976）
- 6) 坂本元子：臨床栄養，**47** 715（1975）
- 7) 高橋重磨：栄養日本，**20** 38（1977）
- 8) 園田他2名：臨床栄養，**34** 361（1969）

昭和53年3月29日受理